

移行期における中国地域社会の文化と風俗に関する事例研究 —内陸農村の社会関係資本という視点から捉える— (前 編)

張 成

1. はじめに

1-1. 研究の背景

数年前、筆者の村では道路建設を計画した。村人は数年も議論が続けたが、錯綜する利益関係が絡んでいたため、中々捗らなかった。昨年、師走に道路が完成した。この道路建設は一見簡単にできると思われがちだが、村人にとって様々な困難を乗り越えた大きな出来事である。本稿ではこの事例から出発して現代中国の地域社会でのいくつかの事情を考察し、移行期における現代中国の急激な市場経済化による競争激化、限られた資源の争奪、極端的な利己主義の蔓延、村人の対人関係などが浮き彫りになった社会現象の事情及び深層的原因を考えてみたい。所謂「大時代」^①の中で何故これらの現象が起きたのだろうか。これらの変遷を社会学と文化的視点からどう解釈すべきか、一体どのような歴史的、政治的及び社会的な原因がこのような現状をもたらしたのだろうか、という問いが浮かび上がる。

今日の中国地域社会における様々な混乱は、単に道徳喪失という単純なレベルを超えて、信仰欠如や政府無能を主張する言説の台頭、管理監督の不当をめぐる議論の高まり、複雑な様相を呈している。阿古^②の説明を借りると、筆者の故郷であるA村には典型的な特徴がある。それは地域社会の紐帯が弱く、村の幹部は面倒な問題に巻き込まれることを厭い、積極的に地域と関わろうとしないため、公共事業が組織されるのが困難であるということだ。若者の多くは都市へ出稼ぎに出ており、空洞化が進んでいる。「社会関係資本」^③(social capital)が発達せずに、いわゆる「コミュニティーガバナンス」が殆ど機能していない。

また、現在の中国社会では信頼危機に直面しているとよく言われている。転

倒したお年寄りに手を貸さないという現象がしばしばニュースになっている。一方、日本ではよく「絆」という言葉が口にされている。政治領域では確かに数年前民主党は「縦に結びつく権利社会ではなく、横につながり合う「きずな」の社会を作りたい」というようなマニフェストにも唱えられたような人間関係の重要さが求められている。ここで言われている「信頼」と「絆」は筆者の中国地域社会では極めて希薄になっている社会関係資本を考える契機となった。

本稿では筆者の故郷を含め三つの調査地で観察された現状を踏まえ、フィールドワークとエスノグラフィーという手法で得た情報やデータを基に、中国の地域社会が抱えている重大な現実問題を対象としながら、論理的な枠組みを構築することを試みる。村の文化衰退と生活実態を手がかりに中国地域社会における村民間の絆またはネットワークの現状を考察し、中国地域社会の社会関係資本のあり方を捉えていきたい。

1-2. 先行研究

長年、中国地域社会に関する研究が国内外を問わず盛んに行われている。とりわけ地域社会の経済、環境、出稼ぎ農民工、社会保障、過疎化、留守児童などの問題は広範囲にわたって数多く取り上げられた。また、中国の農村社会を研究する上で、最も注目されるのは中国政府の「模範村」(お手本になるムラ)である。中国内外の研究がこれらのいわゆる「模範村」でモノグラフ的な研究を主として取り組んでいる⁴⁾。さらに、地域の伝統行事、価値観の変遷に関する論文も少なくないが、地域社会を社会全体の枠組みに入れて、農村と都市部の問題を共に考え、社会関係資本に注目する研究は惜しむらくはそれほど見当たらない。以下、先行研究の到達点と残された課題についてレビューしておく。

李小曼(2008)は地域社会の文化建設と国家体制の関係について詳しく論述した。新中国が成立して以来、農村地域の発展と建設は一度も「建設される」という受身の意識から脱出したためしがない。1949年以降およそ20年の間、「合作化」運動⁵⁾は「農業は大寨へ学べ」というスローガンのもと地域社会を改造した。これは典型的なトップダウン式の建設である。その後文革大革命が終わるまで「一大二公」⁶⁾「一平二調」⁷⁾などのイデオロギーの影響を受け、地域社会の伝統的な文化を徹底的に改造した。前世紀の八十年代に「家庭下請け責任制」が実施されてから、閉ざされた地域社会は徐々に都市化の影響を受け、

経済的な面では成果を取めたが、伝統文化の衰退が一向に改善されていない。地域社会の伝統文化の再建は上から政策を決めるというトップダウン式によって地域差の問題を解決できない。地域社会の住民を動員し、地域社会の主導性を発揮しなければならないと主張している。李は地域住民の主導性こそ、地域の文化と生活を活発化する最も重要な要素であると認識しているが、村民間の信頼関係、ネットワークなどの社会関係資本の現状について正確に把握しているとは言い難い。

近年政府主導の「新農村建設」⁸⁾ というスローガンが唱えられ始めた。これについて、徐⁹⁾は「農民の生活も目に見えるほど豊かになり、農業税が廃止されたおかげで、農民の負担は大分軽くなり、物質生活が良い方向に転換しつつある。しかし、農村の伝統文化が萎縮し、文化施設の不備、経費の不十分等であるがために、農村社会の生活のなかで文化生活が極めて乏しく、精神生活が非常に単調である。地域伝統文化への関心度合いは‘社会主義新農村建設’の要求に相応しくない」と指摘し、農村における伝統文化建設の重要性を訴えた。それから、徐(2008)¹⁰⁾は「優秀な伝統文化の多くは広大な農村に保存され、山間地帯に流行し、代々の村や民間に永く伝えられてきている。しかしながら、現代文明の強烈なインパクト及び伝統文化が長期間にわたって蔑ろにされてきたことと相俟って、多くの文化が次第に忘れられ、物質文明と精神文明のアンバランス問題が浮き彫りになった。」と述べた。最後に地域社会の文化衰退の現状に懸念を示した後、政府を主体にして地域社会の文化を再建設すべきと主張している。

農村における文化の衰退について、梁¹¹⁾は自分の生まれ故郷梁庄¹²⁾を被写体にして近年の文化衰退事情を詳らかに叙述した。「世間でよく言われるのは経済の衰退は文化の混乱と衰退を招く。何故かと言うと、文化の伝承が安定的な基礎はなければならないからである。すなわち、生活が安定で経済的にも余裕があったこそ、文化の内在と形式が十分に発展できよう。だが、現在の中国農村状況はこれと真逆である。各家庭の収入が増加し、農村全体の経済も急速に発展してきた。しかしながら、文化¹³⁾、伝承的な面においても精神的な面においても、さらに知的探求の面においても今は断裂と衰退になっている。中国ではこの断裂と衰退を‘転型’という言葉で一括りされているが、このいわゆる‘転型’の背後に巨大な文化破壊があることが忘れがちである。」梁は自分の

故郷を調査地にして、新世代家庭では皆それぞれ出稼ぎに外出し、殆ど春節しか帰らず、村の政治、公共事業例えば選挙、道作り、学校建設などに関心を持たないという現実を如実に描写した。梁の描写から梁村の社会関係資本が非常不足している状態を読み取るに難くない。梁は郷土文学を書く手法で自分の故郷を描いただけで、社会学と文化的な視点からの分析はあまり見当たらなかった。

更に、地域社会の文化破壊、人間関係、秩序の崩壊及び道德の関連について、董¹⁰は「今日、農村の衰退と過疎化は様々なことに起因しているが、最も大きな原因は農村の日増しに深刻化している原子化¹¹であると言っても過言ではない。近年、ムラという組織が次第になくなるに伴い、多くの農村共同体が崩壊しつつあり、ムラの公共空間が切り刻まれ、人間関係は疎遠になり、協力関係はますます形成できなくなった。実際の生活に合う共同文化が欠如し、以前、ムラに存在していた道德、輿論、価値体系も次第に崩壊している。」と述べている。賀と董は当今中国農村社会における農民の倫理道德の喪失と価値観の変遷を社会問題とみなしているだけで、彼らの研究にはこれらの現象を社会関係資本という視点からの分析は見当たらない。もっとも、筆者が原子化は過疎化と社会関係資本の弱化原因なのか、それとも結果なのかについては疑問を感じている。

日本の中国農村研究者田原¹²は「中国の農村に関しては情報の偏りが顕著である。発展の裏側に取り残された悲惨な農村というイメージ、一部のセンセーショナルな貧乏、暴動、陳情などのイメージのみが針小棒大に伝えられる傾向にある」と指摘している。田原はコミュニティスタディの手法で中国農村の東部、中部、西部それぞれの公共建設取り組みを描いて見た。中でも中部農村は「自力更生」で、社会関係はバラバラな「原子化」状態にあると言われている。宗族に代表される伝統的な人間関係がすでに消失しており、他方では市場経済に基づく新しい人間関係は形成されておらず、そのためだれもが自分の小さな家庭の利益のみを顧みて団結せず、村落生活が立ちゆかなくなっている。コミュニティ住民を結びつける紐帯の解体現象は、公共建設の停滞を招き、地域経済の発展速度に影響を与えるのみならず、社会治安や老人扶養問題などにも及ぶ社会問題発生の原因ともなっていると指摘した。田原は地域別に中国の農村社会における人々の間の協力的な行動を促す「信頼」「ネットワーク」の異同を

分析していたが、全体主義の政治体制が中国の地域社会の社会関係資本の芽生えにどのような影響を与えているか、また経済格差が地域社会のソーシャル・キャピタルとどう関わっているかについての主張はなかったのである。

中国研究者阿古（2009）¹⁰ は、湖北省にある村の水利・土地利用からスタートして中部農村の社会関係資本について考察し、地域の社会関係資本が発展しないのは、中部農村の場合、自然環境の厳しい西部農村とは異なり、人的要素に起因する側面が大きいと指摘している。灌漑システムの崩壊、土地区画調整の難航という現実になった今日でも、「組織依存」の体質が変わっていない。市場経済によって変化を迫られる中、失墜した父権は回復せず、家族の社会的機能は失われる一方であり、道徳・イデオロギー面に空白が生じたことから、「公德心のない個人」が生まれやすくなっているのが背景原因だと深く分析した。

以上を纏めて言えば、先行研究では中国の地域社会における文化の衰退を取上げる論文はあるが、様々な現状に内在する共通の原因を社会関係資本のアンゲルから探る試みは殆ど見当たらない。そして中国における多くの研究は、文化の衰退を食い止めるのは政府の義務だと主張し、外在的な原因を考えている。娯楽活動の砂漠化（典型的な例は賭博問題）に対して、政府が何らかの政策或いは禁令を出し、厳しく取り締まるべきだと指摘するに留まっている学者が少なくない。

本論は先行研究と異なり、以上に挙げた問題を社会関係資本に注目するという視点から捉え、中国の政治体制ポスト全体主義との関係からアプローチしていきたい。長年にわたる全体主義及びポスト全体主義の政治体制の下、現在中国では国家と個人の間において不可欠な「社会」が欠落していることが最も大きな原因ではないかという仮説をたて、幾つかのケーススタディーを事例に取り上げながら分析していきたい。

1-3. 調査概要と調査地の概況

まず調査の構成について、本稿の主旨との関係上、構成の概略のみを記しておく。本稿では三つの村の文化事情を参与観察と聞き取り調査でトータルに把握し、錯綜する各事情の背景原因について検討を加える。そして、単にこれらの現象が起こったのは道徳喪失、信仰喪失など社会一般的に言われているよう

な原因に帰するのではなく、移行期における中国の地域社会の社会関係資本のあり方という視点から分析したい。

1-3-1. 調査進行状況と基本内容

調査の進行状況は以下の通りである。第1次調査は、2012年12月凡そ3週間、農業中心のA村を対象に行った。第2次調査は、2013年8月2週間、県道に近くて交通の便が比較的に良いB村を対象に実施した。第3次調査は、2014年12月一ヶ月間、兼業農家の比率が高いC村でインタビューした。第4次調査は、2015年8月凡そ一ヶ月間、A、B、C三つの村に滞在して参与観察をした。

参与観察と聞き取り調査では、以下の質問項目を心がけて行った。

基本属性：

性別、年齢、学歴、職業、住まい、婚姻関係、世帯構成、移動手段、収入、
宗教信仰

社会的信頼度

近隣者との付き合い程度、友人・知人との付き合い頻度、親戚との付き合い頻度、文化活動への参加経験、村の公共事業への参加意向と頻度、村自治会・選挙への参加頻度

社会儀礼

村人の結婚式に参加度合い及び役割、家を建てる時の互助状況、葬式出席の義務を感じる程度・地域の祭礼への参加程度、出産、進学、冠婚葬祭の参加状況。

1-3-2. 調査地の概況

筆者がフィールド調査をおこなった村は、中国内陸部湖北省の南東部に位置する県級市⁸⁸（注）で、長江流域に位置するW市である⁸⁹（筆者の出身地である）。具体的な拠点はW市に管轄されているア鎮A村、イ鎮B村、ウ鎮C村である。以下はW市及び三つの鎮について紹介しておこう。なお、正確な位置については地図に参考する。

W市は中国華中地域に位置する湖北省の東部、長江北岸に位置する。北部は大別山などの山地、中西部が丘陵地、東南部が平原となっている。湖北、安徽、

江西三省の境にある町である。1987年、県級市に改編された際に、県庁がW鎮に置かれたのでW市に改称された²⁰。市は4街道弁事処と8鎮（316行政村）より構成されていて、面積は1200.35平方キロメートルで、人口はおよそ80.77万人で、そのうち都市戸籍は凡そ17.44万人で、農村戸籍は63.33万人である。2013年のGDPは202億元であった。耕地面積は50万畝²¹である²²。本稿ではフィールド調査は当市の自然村A村、B村、C村で行われた。それぞれの鎮と村の概況については以下（図表2）の通りである。

1 ア鎮はW市の東南部に位置している。長江中下流の沖積平野である。面積は63.8平方キロで、総人口は約4.7万人である。湖北省の重点棉生産地の一つである。2013年現在、一つの居民委員会と8行政村を管轄している。フィールドのA村の主要な農産物は棉と小麦で、川魚を養殖する農家もある。76世帯で、総人口は307人である。青壮年労働人口167人中、141人が出稼ぎに行っている。耕地面積は凡そ587畝で、一人当たりの面積は約1.9畝である。2013年の一人当たりの年平均年収は8900元である。

2 イ鎮はW市の東部に位置している。面積は138平方キロで、総人口は約8.3万人である。地理条件に恵まれ、交通網が発達している。全体的な産業構成として、北部は林業及び果物産地として位置づけられ、中部は菜種の油産地、



1 湖北省各市區

南部は太白湖養殖魚貝業となっている。2013年現在、下に二つの居民委員会と39の行政村を管轄している。自然村は全部あわせて377村あり、16110世帯から成り立っている。フィールドのB村の主生産作物は稲作で、それ以外にイモ類や雑穀も作っている。67世帯で、総人口は287人である。内青壮年労働人口192人、161人出稼ぎに行っている。耕地（水田含む）面積はおよそ420畝で、一人当たりの面積は約1.46畝である。2013年の平均年収は8750元である。

3 ウ鎮はW市の中南部に位置している。面積は104平方キロ、人口は約5.9万ある。1987年現在のウ鎮に改名された。2013年現在、下に一つの居民委員会と29の行政村を管轄している。フィールドのC村は稲作が主な産業でありながら、法事を行う“道士”^⑧という職業にも従事する兼業農家の多い村である。43世帯で、総人口は192人である。内、青壮年労働人口114人中、62人が出稼ぎに行っている。耕地(水田)面積は凡そ240畝で、一人当たりの面積は約1.25畝である。2013年の平均年収は9400元である。

図表 2 調査地三つの自然村に関する概況

| 村の名前 | 世帯数 | 人口 | 耕地面積 | 平均収入 | 産業特徴 |
|--------|-------|-------|-------|--------|-------|
| ア鎮 A 村 | 76 世帯 | 307 人 | 587 畝 | 8900 元 | 棉, 小麦 |
| イ鎮 B 村 | 67 世帯 | 287 人 | 420 畝 | 8750 元 | 米, 養殖 |
| ウ鎮 C 村 | 43 世帯 | 192 人 | 240 畝 | 9400 元 | 米, 兼業 |

(注：2013年W市統計年鑑のデータを抽出し、筆者が作ったものである)

1-4. 本稿の研究方法

これまでの研究では、ある社会を理解するには、まず政治的、経済的のデータを使い、文献資料を利用してマクロ的に分析するやり方が多く見られる。だが、中国における政治的、社会的に「敏感」とされる問題を調査する場合、「政治性」はより用心が必要になる。現地の人々と密接な関わりを持つことなくしては有力な情報は得られず、中の世界を覗くことが難しいと言われている。

そのため、そうしたアプローチには、社会の深層に横たわる構造、力学また民衆のエートスを把握するには限界がある。

人類学の研究でよくエスノグラフィー (ethnography) という手法が使われているが、文字通り「民族(ethnos)について書かれたもの(graphy)」であり、写真やフィルムなど映像記録も含まれる。文化人類学の手法もベースとして、特定の民族の特徴を描き出すのが中心であるが、現代社会におけるさまざまな組織や集団、個人にも焦点を当てることもある。本稿では、フィールドワークという経験的調査手法を通じて、研究対象である集団や人々の社会生活を観察し、体系的に記述を整えていく。調査の具体的な方法は、インテンシブなインタビューと参与観察である。ただし、様々な事情で長期間の調査を行うのが難しいため、本稿の研究方法は厳密に言えば「エスノグラフィー」ではなく、「エスノグラフィック・スタディー」なのである。幸いに農村に生まれ育った筆者は、いわゆるインサイダーの身分でもあり、自分の生活経歴と体験を生かし、より深層の地域社会が見えると思われる。数回に亘り、フィールド地に滞在し、人々の日常行動と対人関係を観察した。また、必要に応じて政府部門にも聞き取り調査を行い、可能な限り資料を提供していただいた。本稿の論証部分では、近年中国の公共知識人の書いた論文、著書に参考し、綿密かつ質的に分析するというアプローチ方も取っている。資料としては県誌などの公文書も参考に入れる。

最後に、歴史的地理的更に民族的にも複雑な中国を理解するには、ただ関連する文献、資料、データを分析するだけでなく、社会学でよく使われるフィールドワークをも活かすべきである。本稿の不足な所と関係しているが、社会学の調査には限界があることを念頭に置いてもらいたい。中国は9億以上の農民を有していて、地域差がとてつもなく大きい。いかに現今の地域社会を研究し、地域社会の全体図を構築するかは研究者にとって大きな難問であること、費孝通と呉文藻が切り開いた「コミュニティスタディ」のみではある集団の心理傾向、行動ロジックを抽出するのはほぼ不可能に近いという現実を知らなければいけない。即ちアンケート調査やインタビューで精密な意識調査の手法で測定するのも限りがある。これらの不利な要素を克服し、より正確、客観的な結果を導き出すように努めたい。

2. 文化と社会関係資本について

2-1. 文化の定義

文化という概念の起源はラテン語の *cultura* であり、本来の意味は「耕して得た物」である。この概念は色濃く農耕社会を反映している。人類社会と動物社会の区別の最も重要な要素の一つは文化の有無である。同時に、文化の伝承は人類社会の維持と発展に大きな寄与をしてきたことは誰も否認しない事実である。

文化を代表的な定義したのはイギリスの文化人類学の学者タイラーである。文化とは「特定の社会の人々によって習得され、共有され、伝達される行動様式ないし生活様式の体系」や「知識、信仰、芸術、道徳、法律、習慣その他、社会の成員としての人間によって獲得されたあらゆる能力や習慣の複合体」であると述べている。⁹⁰ また、石黒は「文化を人間の観念体系とする見方によれば、言語様式から知識体系に至るまで、文化内の要素や概念は必ず意味や象徴作用を持っている。この意味構造や象徴作用こそ、ある文化を他文化と区別せしめているものであり、〇〇文化、××文化の特色をなしている。そして、人間の行動や認識を暗黙のうちに規定している」と指摘した上、文化人類学の学者ギアツ、リーチなどの立場による文化の定義は、「象徴形式を通して表現される意味のパターン」「人間の行動に対し外部からコントロールするような認識体系」「世代から世代へ継承されていく伝達形式」「その成員たる人々が認知し、関連づけ、解釈するための知識体系」にまとめられると述べている。⁹¹

文化による表現行為には規範ということが絡んでいる。同じ文化を共有する人たちの間に仲間意識が生まれ、逆に共有しない人には内的なサンクションが働く。そしてまた、同じ文化を共有するか否かによって他者との関係のとり方を変えたりする。文化は人の行動を方向づける力を持ち、他者との関係を規定する役割を果たしている。特定の社会では、文化は規範であり、人々を結ぶネットワークの基礎である。そのため、文化はその社会における社会関係資本にとって非常に重要な要素である。

文化の内容は、物質的文化と精神的文化に分けられるが、広義の文化概念は物質的な文化と精神的な文化の総合体を指す。そのうち、本質的な文化概念は制度と規範であり、具体的に言えば人間が長期的な労働生産の中で育んだ行為

の規範、習慣、生活様式を指している。それに対して、狭義の文化概念は科学文化と知識を指している。本稿では、文化は道徳・信仰と風俗・習慣を含め、ある特定の社会に共有される行動様式と生活様式を指す。

2-2. 社会関係資本

以下は本稿で論じる社会関係資本について定義しておく。

社会関係資本という概念は、英語の social capital から訳されたものである。アメリカの小説家ヘンリー・ジェームスが『金色の杯』で初めてソーシャル・キャピタルという概念を用いた。その後、アメリカの教育者ジョン・デューイの著作『学校と社会』の改訂版にもソーシャル・キャピタルという用語が使われていた。

また、『哲学する民主主義』を著したアメリカの学者パットナムはソーシャル・キャピタルについて「協調的な行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる信頼・規範・ネットワークなどの社会的仕組みの特徴」と定義した。その後の『孤独なボウリング』では社会関係資本について次のように述べている。⁸⁶

社会関係資本が指し示しているのは個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である。この点において、社会関係資本は「市民的美徳」と呼ばれてきたものと密接に関係している。違いは以下の点にある。——市民的美徳が最も強力な力を発揮するのは、互酬的な社会関係の密なネットワークに埋め込まれているときであるという事実、**「社会関係資本」が注意を向けているということである。美徳に溢れているが、孤立した人々の作る社会は、必ずしも社会関係資本において豊かではない、と。**

パットナムの主張によれば、社会関係資本は集団内または集団間の協力を容易にさせる規範・価値観・理解の共有を伴ったネットワークで、個人の資産ではなく、社会やコミュニティに帰属するものである。それに対し、アメリカの学者コールマン⁸⁷は、社会関係資本を「個人の協調行動を起こさせる社会構造や制度」と定義している。彼によると、社会関係資本は、人々がお互いの関係を維持するために行う投資行動の有無により増加したり、減価されるものであるという点で、物的資本や人的資本と同様に資本であるという。たとえば、小

規模で同質性が高く閉鎖性も高い社会的ネットワークのある地域コミュニティでは、人々が相互信頼を形成しているために、いちいち相手の信頼性を判断する必要がなく取引コストが少なく済む。そのために更に協調行動が促進されたり、知識や技能という各個人にとっての人的資本の蓄積が促進されるという。

菅谷⁸⁾によると、社会的ネットワーク論を提唱しているナン・リン (Nan Lin) は、「社会構造に埋められており、目的行為のためにアクセスされたり、または動員可能である資源」と社会関係資本を定義し、社会的ネットワークに投資を行い、特定の構造を構築すると、ある種の経済的なリターンが得られると考えている。したがって、社会的ネットワークを社会関係資本のコア概念と考え、信頼や規範はその結果と見なしている。

以上述べたように、社会関係資本の定義はさまざまで、社会学・政治学・経済学などの分野で多少異なる意味で使われているが、本稿では稲葉⁹⁾が纏めた定義を借り、社会関係資本の基本的な構成要素は「社会における信頼・規範・ネットワーク」を含んでおり、他者に対する信頼、「情けは人のためならず」「持ちつ持たれつ」「お互い様」といった互酬性の規範意識、共通の目的に向かって協調行動を導くもの、また人やグループ間の絆であるネットワークと定義する。

2-3. 文化と社会関係資本の関係

これまで多くの学者が論じられたように、文化は純粋な自然的なものではなく、人類の生産活動の産物である。時代の生産力、生存環境、人間の外界への認知に相応するものである。個々人にとって文化は生まれつきの能力ではなく、後天的なものであり、学習の結果である。人間は誰しも世の中に生まれた以上、人間社会にある既成の習慣に従わなければならない。つまり、否が応でも人間が長い年月に積み重ねてきた経験、価値、規範のある社会に合わせて生きていくことになる。これらの社会文化を習得することによって、個々人の生活が維持できるようになる。勿論、人間は自己の能動性を発揮し、環境に合わせながら新しい文化を作り出すこともできる。

ある社会の中で、異なる個人は皆それぞれ自分の需要に応じて異なる行動を取っている。しかし、これらの行動が他の成員の同意、理解、協力をどれほど得られるかは、その行為の価値または意義がどの程度認められるかに関わって

いる。そのため、個人と集団、個人と個人間の文化の共有度合いがコミュニケーションの鍵になってくる。同じ文化を共有する者同士は基本的な価値と文化符号への認識が同じであるため、協力関係が形成しやすいのである。また、文化は自然に伝承されていく性質がある。そのメカニズムは文化主体が社会化を通して次の世代に既存の文化を認識させ、社会を規制している価値と規範を学ばせ、遵守させていく。次の世代はこのような文化を受け、背景に潜んでいる知識をも身につけていくことになる。

また、文化は人間が長い歴史の中で過去の共同生活の中に積んできた経験を、共同体全体が適切だと判断して受け入れた物事の集積である。文化は一旦形成して確立した以上、それに相応する価値観と行為規範が受け入れられることになると思われる。したがって、文化は共同体の成員の行動を整えることに大きな役割を果たしている。ある集団で形成してきた文化はその集団の人々にとって規範となり、さらにはその文化は内面化し、社会関係資本になっている。何世代にもわたる長期的・歴史的・文化的なものが、人々の社会全体に対する固定概念と信頼を形成するということである。

一方、文化の衰退に伴って、共通の文化と心理の基礎が崩れ、社会関係資本も貧弱になると、結局アノミー現象が起こることとなる。アノミーはで英語で‘*anomie*’と言い、社会規範、倫理道德の基準がなくなること、或いは規範と道德の束縛力がなくなる（役に立たない）状態を指す。デュルケームはアノミー現象について、個人の欲望と行為への規制規範が欠けていて、制度化されておらず、無秩序、混乱している社会状態に陥った状態であると述べている。文化が衰退化している社会では、社会関係資本が形成しにくいいため、正常な軌道に乗るのが難しいと言われている。

最後に、教育は文化にとって最も重要な要素で、社会関係資本とお互いに影響し合う。稲葉⁹⁾は教育が社会関係資本を育むこともあり、社会関係資本が教育に影響を与えることもあると指摘している。文化は教育を抜きにして語れないと言われているので、本稿では文化と社会関係資本を考察する際、調査地の教育現状も入れて考えることにする。

3. 事例調査

3-1. A村の調査

3-1-1. 荒地・水利施設・ゴミ問題 行政を待ちわびる

調査者：筆者 協力者：元書記 M, 村民 H, 大学生村官 W^脚

調査期間： 2013年12月1日から 2013年12月12日

調査地の A 村は市内まで約 26 キロ、鎮政府まで 11 キロ、最も近い市場まで 3.5 キロである。中学生の時筆者は A 村で 3 年間生活していたので、当時農民が月光の下で収穫する光景は今でも頭に焼き付いている。20 年前まで非常に綺麗な田園風景だった。2013 年の 12 月の調査で、数年ぶりの A 村と再会して、驚いたことに、目の前の A 村は記憶の A 村と全く異なっていた。小麦が植えられていた畑が荒地になり、よく遊んでいた林がなくなった。主婦たちの洗濯場所として常に賑わっていた池もほぼ埋まっていて、多くの家屋が廃屋になっている。

協力者 M は 65 歳で、1991 年から 1998 年村の書記を勤めた。村の過去のことを熟知していて、現状もよく把握している。中学 3 年間 A 村に滞在したこともあるので、M は警戒の様子が見られず、調査にとっても積極的に協力してくれた。

まず人口構成を説明してくれた。A 村に在籍している世帯数は 76 で、あわせて 307 人である。内男性 147 人、女性 160 人。60 歳以上は 107 人で、出稼ぎ者は 78 人である。お年寄り一人だけが暮らしているのは 38 人で、一方留守児童は 62 人もいる。以下は対話の録音を整理したものである。

筆者：現在村にとって最も喫緊な問題はなんでしょうか。

M： 耕地が宅地に利用され、農地は急激に減っている。青壮年が皆出稼ぎに行っているんで、その他の農地が荒地になり、数年経てばその土地は利用できなくなるのが一番の心配事です。土地はやはり我々農民にとって命であり、今のところ出稼ぎで稼いだお金でなんとか食べていけますが、しかしこの状態は本当に続けられるのでしょうか。数年後、我々の子孫はこの土地で果たして自分の家族を養っていけるのでしょうか。（タバコに火を付けてから）また、多くの人が道路に近いところに新たな家を作っている一方、元の宅地を手放したく

ない。廃屋のままにしているから、実質的に土地を浪費している。それに、生活ごみをほったらかしにしている、灌漑システムに大きな影響を与えています。利用できなくなっている土地が年々増えています。

（Mと一緒に村の周辺を歩きながら、聞き取りを続けた。）途中で廃屋を数えてみたところ、26箇所もあることが分かった。調査時は旧正月までまだ二ヶ月ほどあるから、出稼ぎにいつている人がまだ帰っていなかったため、新築の家屋の多くは鎖がつけられていた。鎖は既に錆びていて、門と窓に蜘蛛の巣もたくさんあった。周りに様々な雑草は生えていて、手入れしていない状態であった。塀が倒れかけの廃屋と少し離れているところで新築の家と鮮明な対比になっている。

Mによると、荒地になっている原因はいろいろ考えられるが、最も大きな原因なのは農業にとって不可欠な水利施設の荒廃と破壊である。多くの村民はこの村の集団灌漑システムを修繕したいが、皆協力し合えばより高い収穫が得られることが分かっているながらも、4戸のフリーライダーが協力しないので、結局協力した者が損失を蒙り、離反したものがただ乗りできると考える。積極的に水利修繕を推し進める公益心のある村民は「馬鹿者」と看做されてしまい、村民間では信頼関係が構築されておらず、共通の利益を得る機会を逃してしまうのである。村民のロジックは、自分の実際得たもので利益を計算するだけではなく、他人の収益と比較しながら行動を決める。こうした中で、ある特殊な「公正観」が醸成された。それは自分が得している多寡はともかくとして、他人がタダで自分の行動から利益をとってはいけないことである。

途中で村民Hとで出会った、筆者が農村調査していることを分かってからすぐ話しかけてきた。

村民H： 今内の村は非常に大きな問題を抱えています。一番悩んでいるのはごみの問題です。皆自分の生活ゴミを勝手に捨てているから、雨になると、田圃と畑に流され、農地が汚染されてしまい、耕せなくなっています。ゴミと落ち葉などで排水溝も詰まっていて、汚れた雨水がそのまま井戸に流れてしまう。この二三年癌でなくなっている人が何人もいます。奇病が発生し、今まで病名さえ聞いたことがないのも少なくない。本当におかしいですよ。あなた（筆者のこと）は今出世していると聞いているだから、なんとか我々の意見を上に反映してくれないか。政府は今農村に対して何もしてくれないから、我々は見

捨てられたような存在になったと感じています。

筆者は今回の調査の意図を改めてHに伝えた後、彼は少し失望しているような様子が窺えた。その後、別の村民数人との会話に「农村现在这么乱，政府也不来管一管」（現在の農村はこんなに混乱しているにもかかわらず、政府は全く管理してくれない。）という言葉が何回も出ていた。（紙幅のため、後編は次号に掲載させていただくことにする）

華中師範大学外国語学院日本語科講師
一橋大学言語社会研究科博士後期課程

-
- (1) 『大時代』とは、生でなければ死であるという時代であり、転換期に差し迫り、様々な面において激変している時代である。この用語を最初に使い始めたのは魯迅である。軍閥闘争などの大混乱に陥った民国時代を生きた魯迅は、「中国は今正に『大時代』を生きている」と述べている。また社会秩序というよりむしろ人の精神状態、心情の安寧が乱れていることを指している。『大時代』の定義について、許（2012：132）もまた「『大時代』は魯迅の言葉を引用した言い方である。このような時代は中国の歴史上それほど多くない。秦はその一つであり、それから春秋戦国時代、魏、晋、その後は清末と民国などの時代である。」と述べている。総じて言えば『大時代』は「時代転換期」とも言える。日本語の『移行期』と同じ意味である。本稿の時代背景のベースになるのは、この『大時代』『移行期』にある中国である。
- (2) 阿古（2009）p.113
- (3) ソーシャル・キャピタルや社会関係資本などの呼び方があるが、本稿では両方とも意味的に区別なく使用する。
- (4) 中日の研究者に限定した場合、例えば、瀬川昌久（1991）聶莉莉（1992）石田浩（1996）陸学芸（1994）などがある。そのほか湖南省において百村調査を行っている于建嵘がある。また、村民自治に関しては、徐勇（1997）、張厚安・徐勇・項継権（2000）などが現地調査の資料を元に成果を挙げている。
- (5) 中国では、1953年から農業の社会主義化を目的とする農業生産互助合作運動のことである
- (6) 1958年から始まる人民公社化運動期の用語、人民公社の目標は公社以前の高級農業生産協同組合に比べて、一つにはその規模はずっと大きく、二つには財産の共有化をいっそう進めなければならない。（白水社 中国語辞典による）
- (7) 働いても働かなくとも同じといった悪平等主義と、上の命令によって無償で物資を調達することである。
- (8) 2006年中央政府は、第十六回五中全会で「生産発展，生活寛裕，郷風文明，村容清潔，管理民主」という五つの主旨で新しい農村建設を目指すスローガンである。日本語に訳せば、生産を発展させ、生活を豊かにして余裕を生み出し、農村の気風を文明的にし、農村を清潔に整え、管理を民主的にするという意味になる。

- (9) 徐(2008) p.12
 (10) 同上 p.16
 (11) 梁 (2015) p.224
 (12) 内陸の河南省の西南部に位置している村である。
 (13) 梁鴻によるとここで言う文化は伝統的な考え方、道徳、習俗だけではなく、現実生活の文化状態のも含まれている。
 (14) 董 (2008) p.24
 (15) 村共同体の崩壊に対する賀雪峰が提示した学術用語で、筆者がそのまま日本語として使用する。人間関係が疎遠になり、社会のネットワークが解体し、社会規範が失効になることを指す。賀雪峰『新郷土中国』広西師範大学出版社、2004年。
 (16) 田原 (2009) pp.121-131
 (17) 阿古 (2009) p.113
 (18) 「都市」を概して捉えるのではなく、区別して考えることが大事である。少なくとも、
 ① 沿海部大都市 (北京、上海、杭州、広州など)、② 内陸中核都市 (西安、重慶、成都、武漢など) ③ 平均的な省城 (鄭州、南昌、蘭州、貴陽など) ④ 地区級市の中心地、⑤ 県 (県級市) の五ランク程度に区分することができる。県級市はその中では小規模な地方都市である。
 (19) 調査地を選ぶ理由について、筆者の考えとしては、例えば江蘇省の華西村とか安徽省の小崗村そして河南省の南街村のようないわゆる模範村は確かに知名度が高いが、中国の典型的な地域社会の概念と掛け離れ、真の地域社会の現状が反映できないと思われる。逆にあまり知られていないいわゆる発展途上の地域は問題を分析する上で真実に近くて、より調査地に適していると考えられる。
 (20) 1987年10月22日まで広済県という名前を使用していた。(W市県誌)
 (21) 畝は面積単位である。1畝=6.67アール (約)
 (22) 2013年W市統計年鑑による
 (23) 「道士」広済県誌によると、道士は道教の神主で、道教を信じ帰依する者である。道教の教義と戒律を受け入れ、俗世間から言えば貧しくて苦しい生活に耐える一方、本人は自分が脱俗で神聖な宗教生活を送っていると考えている。同時に、道士は道教の伝播者として神秘的な方式で道教を広め、宗教のために力を尽くしているとされる。本県の道士は一般的に、葬式、廟宇法事、風水などに関わる仕事に従事する人を指す。単に道教を信じるだけではなく、様々な仏教活動にも参加している。
 (24) 石黒 (2010) p.65
 (25) 石黒 (2010) pp.66-67
 (26) バットナム(2006) 柴内康文訳 p.14
 (27) コールマン (1988) pp.95-120
 (28) 菅谷 (2007) p.11
 (29) 稲葉 (2015) p.27
 (30) 稲葉 (2015) p.56
 (31) 大学生村官とは大学など高等教育機関の卒業生のうち、各地の地方政府による選抜を経て、農村において村レベルのリーダーの一人となって、在来のリーダーたちの補佐をする若者のことである。「村官」というのは、村の「官」すなわち「役人」のことで、役人は「幹部」の概念に相当する。